

学天則

1928年(昭和3年)、大阪毎日新聞社学芸部顧問の西村真琴が製作し、大礼記念京都大博覧会に出展され、東洋初のロボットと言われる「学天則」。これを復元したものが、科学館の正面入口のすぐ横にあります。今回は、この「学天則」が展示されるまでのいきさつを…。

大阪市立科学館では、1989年10月の開館から2009年11月までの20年間、プラネタリウムのドームスクリーンに魚眼レンズで映画を映し出す「オムニマックス」を行なっていました。メインは「グランド・キャニオン」「スペースシャトル・オデッセイ」「スペシャル・エフェクト」などの約40分間の作品ですが、開館から1992年10月までは「One day in Osaka」、1992年11月から1999年11月までは「大阪—The Dynamic City」という、大阪の街を紹介する約6分間の当館オリジナル作品も併せて上映していました(一部期間を除く)。

その「大阪—The Dynamic City」で案内役として登場したのが学天則です。撮影に使われた学天則の模型も館内で展示していたのですが、実際の学天則と比べると、ずいぶん小さく、顔つきもだいぶ異なるし、動かない…ということで、2008年の展示改装に合わせて当時の写真等から復元したのがこの「学天則」なのです。

その学天則の姿には、製作した西村真琴の考えがいろいろなところに表われていますので、ぜひじっくりとご覧ください。例えば、頭に植物の葉をかたどった冠を載せていますが、植物の葉で作られられた栄養は、植物だけでなく、それを食べる草食動物や、さらにそれを食べる肉食動物の栄養源にもなっています。そこで、その重要な植物の葉を冠にしているのです。

長谷川 能三 (科学館学芸員)



「大阪—The Dynamic City」の撮影に使われた学天則の模型



「学天則」(復元)